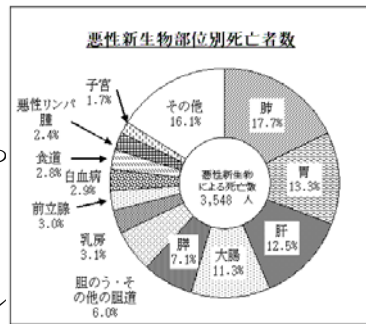


## 肺・呼吸器検査編

放射線科 馬場健吉

はじめに：

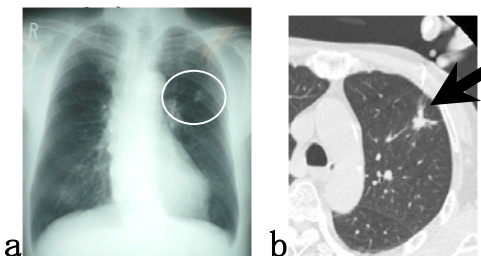
平成11年以降、肺がんは胃がんを抜いて日本人のがん死亡のトップとなっています。さらにその割合は増加傾向にあります。



検診で行われる胸部レントゲンでは、心臓や骨、血管などが死角となつて見えない部分があり、小さい陰影(かげ)や淡い陰影では見つかりにくいという欠点があります。東京都予防医学協会によると、老人保健事業統計のデータでは、地域における一般的な肺がん検診(胸部レントゲン)の場合、全国の受診者670万人に対し、10万人対肺がん発見率は47人でした。これに対し胸部CTの発見率は、CT導入前も10万人対163と高くなっています。**CT検査は肺がんの発見にかなりの力を発揮するものと言えます。**

CT検査：

呼吸器検査ではCTが最もよく用いられます。通常寝台の上に横になって、息を止めてもらいます。CTでは胸部レントゲンはっきりしない病変が描出されているのが分かります。肺がんの確定診断は喀痰検査や気管支鏡検査で組織を見ることになります。ただし、病変が小さいものや末梢(肺の端の方)のものはCTガイド下での組織検査を行



左肺がん：胸部単純写真(a)で1.5cmの陰影(かげ)が見られます。

胸部CT(b)でよりはっきりと描出されています。CTガイド下で組織を調べる検査をしています(矢印)。

CTではその他に血管の情報も分かります。造影剤を使えば肺血栓塞栓症、胸部大動脈瘤や大動脈解離(大動脈の血管壁が裂ける病気で生命に関わる病態です)の診断も可能です。



胸部大動脈瘤：造影CT検査で動脈瘤を描出しています。64列マルチスライスCTで明瞭に描出されています。

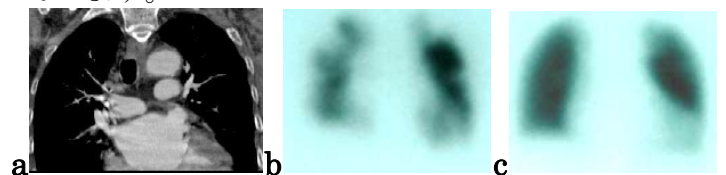
MRI検査：

呼吸器のMRI検査ではCTの造影剤アレルギーのある方やCTでがんなどが血管や心臓・気管などに広がっていないかどうかを調べるときに用います。また、良悪性の診断のために、拡散強調画像を用いて検査することもあります。

核医学(スペクト)検査：

肺の良悪性の診断にタリウムシンチ検査を行うことがあります。最近ではPET検査を行うことが多いようです。

その他には肺血流シンチがあり突然死の原因である肺塞栓症の診断に使われます。地震や飛行機などで起こったエコノミー症候群(肺塞栓症)で死者を出したことで有名です。この病気は足の腫れる深部静脈血栓症の方や腹部の手術後の方に多く報告されています。CTでもこの診断は非常に有用ですが、肺の末梢にある血栓症はこの検査がよく表している可能性があると考えられています。



肺血栓塞栓症：造影CT(a)では血栓ははっきりしないが、肺血流シンチ(b)では肺の中に欠損がみられ、診断できています。治療後(c)は欠損がなくなっています。

最後に：

胸部レントゲン検査で異常を指摘された方は少なくはないと思います。ここに挙げた画像診断はほとんどが寝台の上に寝ているだけの検査です。お気軽に受診されてください。検査に関するお問い合わせは主治医の先生または放射線科外来までお願いします。